男女共同参画に関する情報交流誌

あいのかぜ

VOL.45 2018・春号

“あいのかぜ”は、男女共同参画社会の実現に向けて、市民一人一人が男女共同参画に関する正しい理解と認識を深めることを目的に、公募市民３人からなる編集委員によって企画・編集された情報交流誌です。

［編集・問い合わせ］
男女参画・市民協働課　☎443－2051

■特集　悩んでいる人の心に寄り添う 臨床心理士

男女共同参画推進センターでは「女性臨床心理士による夫婦・男女に関する悩み相談」を行っています（広報とやま毎月20日号に掲載）。
今回は、担当の竹村祥恵先生にお話を伺いました。

竹村祥恵（たけむらさちえ）先生
臨床心理士として、県内の公的機関などで心理相談を行う。
※臨床心理士の資格は、養成大学院を卒業後、臨床心理士資格審査に合格することで取得できます。

臨床心理士とはどんな仕事？

臨床心理学の知識や技術を用いて、悩んでいる人、心の問題で苦しんでいる人に寄り添って支援する仕事です。医療機関や教育現場、家庭裁判所など、さまざまな分野の施設で心理相談を行っています。

臨床心理士になったきっかけは？

私は、実はあがり症の子どもで、人前で話すことにとても悩んでいました。いろいろ調べると、あがり症＝対人恐怖症だということがわかったんです。こういうことをもっと勉強していきたいと心理学を学べる大学に進学し、それを活（い）かせる職につきたいと考え、臨床心理士になりました。

夫婦・男女に関する悩み相談ではどのような相談が多いのですか？

相談者のほとんどは女性ですが、相談内容はさまざまです。パートナーの性格や行動に悩み、どのように理解して関係を改善すればよいかという相談や、夫婦の離別が子どもに与える影響、自分の心の持ちようなどについての相談が多いです。
相談に来られる方は、自分の思いや考えは決まっていて、答えはある程度出ていることが多いです。そのため、こちらからアドバイスするというよりも、心の整理を手助けし、最終的には背中を押してあげる、ということに尽きるかと思います。

今後、どんな方に利用してほしいですか？

男性にもぜひ利用してほしいです。「夫」や「父親」として、パートナーがなぜこんな行動や考え方をするのだろうか、という悩みをお持ちの方もいらっしゃると思います。「この程度のことで」と躊躇（ちゅうちょ）せず、気軽に相談してほしいです。

取材を通して…

臨床心理士への相談、というと何となく敷居が高いような気がしていましたが、悩んだり、苦しんだりしていることを、じっくりと聞いてくれる存在だということがよくわかりました。相談する側も相談という形で「話をする」こと自体が悩みや苦しみを解消する第一歩だと気づかされました。

「家事ダン」教室

女性の活躍推進を後押しするため、市内在住の男性を対象に、ボタン付け、アイロンがけ、料理、収納など家事全般に関する講座「家事ダン」教室を開催しました。参加者は「家事ダンマイスター」を目指して、真剣に課題に取り組みました。

▲「衣類のケア」講座の様子

★男女共同参画推進センターでは、悩み相談や家事ダン教室など、男女参画に関する事業を行っています。ぜひご利用ください。

問男女共同参画推進センター
☎433－1760

■ レポート
TOYAMA ウーマンフェスタ 2017
～元タカラジェンヌが教えます！女性が輝く秘訣とは～

平成29年11月23日、女性の活躍推進を考えるイベント「TOYAMA ウーマンフェスタ 2017」がタワー111(牛島本町) で開催されました。市出身の愛加あゆさんをお招きして行った、市長とのトークとライブの様子をお伝えします。

トーク／愛加あゆさん×森市長

愛加あゆさん
市出身。宝塚歌劇団娘役トップを務め、2014年退団。現在は女優として、舞台を中心に幅広く活躍。姉で女優の夢咲ねねさんも宝塚歌劇団の元娘役トップスター。姉妹そろってのトップ就任は歌劇団史上初の快挙。

現在の過ごし方について

愛加　今年はミュージカルの舞台を中心に活動しています。宝塚退団後は健康にも気を遣うようになり、「日本健康マスター検定」にも合格しました。

お姉さんとの関係について

愛加　とっても仲良しです。姉の影響で宝塚に憧れ、私も目指しました。しかし入団当初は、何でも一人でこなしてきた姉と比べられることが嫌で、「なぜ姉と似ていないのか」と悩んでいました。そんな中、ある演出家からの「あなたたちは似ていないからこそいいんだよ」という一言で吹っ切れて、こんなに頼れる存在が近くにいたのだと気付くことができたんです。

厳しかった宝塚音楽学校時代

愛加　学校時代は厳しい規則があり、一人の失敗は同期全体の連帯責任でした。例えば掃除については、担当する時間や場所の役割分担が徹底されていました。仲間のためにも、自分に与えられた役割を一生懸命こなしていましたね。

市長　女性が活躍するためにも、日常生活での役割分担は大事ですね。任せられる家事は任せた方がいいと思います。疲れた時は誰かの力を借りればいいという、割り切りの気持ちも必要です。

宝塚歌劇団トップまでの道のり

愛加　下級生に先を越された時は、辛く落ち込みました。自分の価値もわからなくなり、舞台に立ちたくないと思う時もありました。でも、ファンの方々の応援があり、立ち直って頑張ることができました。それをきっかけに、自分の地位を気にせず、舞台人としてどうあるべきなのかを考えるようになりました。

市長　（メモがびっしりと書かれた愛加さんの台本画像を見て）華やかな世界の中、見えないところで努力されているのですね。

ふるさと富山の魅力

愛加　ご飯が美味しいのはもちろん、立山連峰の素晴らしい景色がいつも見られるのも大きな魅力だと思います。

市長　市では、多くの人に訪れていただけるよう、活力ある街づくりを進めています。2年後には富山駅構内で路面電車が南北に繋がります。これは新しい市の魅力になると思います。また、産後ケアや病児保育など、女性が暮らしやすく、働きやすい環境についても整備しているところです。女性の皆さんには、自信を持って活躍していただきたいと思っています。

愛加あゆさんによるライブ

生バンドの演奏をバックに、ミュージカル曲やポップス、宝塚歌劇団の「すみれの花咲く頃」などを熱唱されました。また、アンコールでは、ふるさと富山への思いをこめて「カントリーロード」を贈られました。

かわいく可憐でありながらパワー溢れる歌声に、来場者は魅了されました。

女性限定 好感度アップセミナー も開催しました

㈱ANA総合研究所の研究員で、市地域づくりマネージャーの青山景子さんを講師とした女性限定のセミナーが開催されました。

青山さんは、自身の国際線CAとしての経験から、「第1印象は15秒で決まるので、笑顔や身だしなみ、動作、所作を丁寧にすることが大事です。」と、好感度アップの秘訣を語ってくださいました。

取材を通して…

女性が活躍するには周りの理解も必要ですが、自分の信念が大事だと感じました。愛加さんのように前向きに自分を信じる姿に感銘を受けました。頑張る女性には周りを明るくする力があるのだと感じました。

平成29年度 男女共同参画社会づくり作文コンクール

男女共同参画社会の実現に向けた意識を高めるため、市内の中学生を対象に男女共同参画に関する作文を募集しました。185点の応募作品の中から、入賞された方と、最優秀賞受賞作品を紹介します。

＜最優秀賞＞

髙田朋寛さん（和合中学校１年）

＜優 秀 賞＞

数家麻優さん（南部中学校３年）
名畑亜美さん（城山中学校３年）
広世真麻さん（西部中学校１年）
水戸柚月さん（西部中学校２年）

＜佳　　作＞

上田マリアさん（芝園中学校３年）
追分美希さん　（大沢野中学校１年）
岡島来瞳さん　（東部中学校２年）
奥井いぶきさん（大沢野中学校３年）
河原美希さん　（和合中学校１年）
澤田優菜さん　（大沢野中学校１年）
田中結梨さん　（岩瀬中学校１年）
新鞍明花莉さん（新庄中学校２年）
西村 華さん　（城山中学校２年）
道下光樹さん　（西部中学校１年）

最優秀作品

「手伝い」から「役割」へ

和合中学校１年　髙田　朋寛

「68」これは、父が一学期に焼いた玉子焼きの数です。今年四月、兄の高校入学と共に父の弁当作りが始まりました。弁当作りには、必ず一品は自分で作る、という父なりのこだわりがあるようです。日が変わるまで仕事をしても朝六時には弁当作りを始める父に「毎日よく頑張るよね」と言うと、父は「弁当を作るだけで褒めるな」といいます。僕が小学一年生のときに母が体調を崩して以来、PTA活動も学校行事も父が出ています。だから、決して弁当作りだけを頑張っている訳ではないのです。でも、父に言わせれば、他の家事は祖父母がやってくれているし、家のことをするために、職場の人にも迷惑をかけているから、褒められたものではないのだそうです。

先日、讀賣新聞に「ワンオペ育児」についての特集記事がありました。一人の従業員がすべての業務をこなしていた牛丼店での業務形態が社会問題になった「ワンオペレーション」からの造語で、主に母親が一人で育児と家事を負担する状況を言うそうです。「日本では、家事育児に約八時間を費やす母親に対し、父親は約一時間で、育児に限れば三十九分」と記事にありました。調べてみると、「お母さんにやさしい国ランキング」（NGO セーブ・ザ・チルドレン）の日本の順位は三十位と低いようです。「イクメン」という言葉が聞かれるように、父親の育児参加は以前より増えたようですが、三歳まで母親が育児に専念すべきという「三歳児神話」なるものがあったり、性別役割分担の考え方が根強かったりして、女性の負担はなかなか軽減されていないようです。

記事の中で最も納得したのは、「手伝いではなく……シェア」という言葉でした。かつて、夏休みの生活目標に「手伝いとして食器の片付けをする」と書いたとき、父が「それはお手伝いじゃなくて、役割だよ」と言ったのを思い出しました。そして、子どもが幼い家は抜きにして、「男女共同参画」の問題は、父親と母親だけではなく、家族全体の問題であり、今までがどうだったとか普通はこうだとかではなく、自分の家庭に必要な形を作れば良いと思いました。父が焼いた「68」の玉子焼きもその形の一つだったのです。今後は僕も「お手伝い」ではなく、家族の一員としての「役割」を考えて行動しようと思います。

「あいのかぜ」編集後記

中村編集委員

今回話をお聞きした竹村先生も、長い期間にわたって悩み相談をされてきて、時にはそのことで悩んだり、気落ちすることもあったそうですが、上司や同僚に相談するなどして、悩みを客観化することで乗り切ってきたそうです。ぜひ見習いたいと思います。

坪田編集委員

TOYAMA ウーマンフェスタ2017を取材しました。会場は愛加さんのファンで埋め尽くされ、皆さんの熱気で盛り上がりました。目指す自分像を持って前向きに輝いていらっしゃる愛加さんの話を伺うと、私たちも元気をいただくことができました。ありがとうございました。

清田編集委員

平成29年度男女共同参画社会づくり作文コンクールでは、多くの中学生が自分の考えを綴っていました。父親と母親が共同で家庭生活を営んでいる姿に感心しました。生徒の皆さんが大人になる頃には、それが当たり前になっていることと思います。